

# 日本人のみた外国 朽ちた寝釈迦、盗まれた遺体（カルチャー・ショック）

著者	中西 嘉宏
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	157
ページ	47-47
発行年	2008-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00004913">http://hdl.handle.net/2344/00004913</a>

# 朽ちた寝釈迦、盗まれた遺体

中西嘉宏

ミャンマー第一の都市ヤンゴンからバスに揺られて約一二時間。モン州の州都モラミヤイン。この街は、イギリス植民地時代に港町として、また社会主義時代にはタイからの密輸の拠点として栄えた。そのモラミヤインからさらに車で三〇分ほど行ったところに、世界最大級（全長約一八〇メートル）の寝釈迦像がある。

その寝釈迦像の建設は約一〇年前から始まったが、現在もまだ続いている。完成が遅れている理由はとても政治的なものだ。そもそもこの場所には高僧として有名なウイン・セイン僧正の僧院があった（今もある）。この寝釈迦設計画は僧正の提案に政府が布施を出して始まった。政府側の代表はキン・ニユンという当時の最有力軍人の一人である。キン・ニユンお墨付きの国家プロジェクト。いかに巨大であろうとも、寝釈迦像の完成は近いと誰もが思った。ところが、キン・ニユンが二〇〇四年一〇月に失脚して状況は一変する。建設資金の大部分を負担する政府の代表がいなくなり、寝釈迦像建設は急速にペースダウン。像の脚部は骨組みだけで作業が止まっている。胴体は六階ほどの階層に分かれていて、中には仏教説話を再現した石像があるものの、石像は色も塗られずにうち捨てられ、

雨漏りで床には水溜りができている。カビは生え放題で、建設中なのにもう朽ちているようだ。寝釈迦は、心なしか悲しげに、その巨体を雨季の雨にさらし、中からは溶接の音がむなしく響いていた。

仏教と政府の関係で言えば、もうひとつ興味深い場所を訪問した。有名な僧正はミャンマーにたくさんいるが、かつてミャンマーの名声を誇ったのがターマニヤ僧正である。モラミヤインからカレン州の州都パアンに向かう途中に、ターマニヤ僧正の僧院がある。かつて何もない山奥だったその僧院の周辺は、いまや小さな町になっている。僧正を慕って全国から人が移り住んできたからだ。政府の力をかりず、一人の僧侶の力だけで新しい町ができたのである。驚きだ。ターマニヤ僧正は二〇〇三年一月に亡くなったが、その後も、遺体は保存用の処置が施されて公開されていたため、多くの参拝客が訪れていた。

ところが、今年の四月二日に事件は起きた。遺体が盗まれたのである。深夜、十数名の盗賊が僧院に車で乗り付けた。彼らは番をしていた僧侶を銃で脅して小屋に閉じ込め、僧正の遺体を持ち去った。僧正の遺体の脇に置かれていた宝石にはいっさい手がつけられていなかったという。目的は僧

正の遺体だけだった。それが持つ宗教的な力を手に入れるためか、それとも他の理由か。

私がターマニヤの地を訪れたとき、持ち去られる際に破壊されたガラスドアは割れたまま残されていた。僧院にとって、新しいガラスを張ることはそれほど難しいことではないはず。私には僧院側が生々しい犯行の跡をあえて残しているように見えた。というのも、犯人が捕まらないことを僧院関係者は予想しているからだ。なぜか。

銃の一回っていないミャンマーで銃を使って僧侶を脅し、幹線道路までの長い一本道を通って、遺体のような隠しづらいのものを、十数人がかりで運び出せるのは誰か。ここまで考えると、多くのミャンマー人の頭には同じ答えが浮かぶ。浮かんだとき、犯人は捕まらないだろうし、遺体も戻らないだろうと確信する。ただ、その答えは口に出さない。答えは沈黙だ。

犯罪や社会問題の核心に近づくほど人が言葉を失う。それはどこにだってあることだが、この国ほどその範囲が広い国はないだろう。戦慄を覚える。

（なかにし よしひろ／アジア経済研究所地域研究センター）